

第1巻 ラ・ガラテーা 本田誠一 訳+注

最初期の実験的な処女作。当時流行の「牧人小説」のスタイルに倣い、散文と韻文の混濁形式を用い、理想郷のごとき自然の中でのさまざまな恋の物語が語られる。「友情」と〈露〉の葛藤を主題に、後のセルバンテスを予感させる人間的な側面が強調されている。前篇・後篇の二本巻として構想され、晩年に至るまで後篇の執筆・刊行を切望していたが、果たせず、この前篇だけに終わった。

第2巻 ドン・キホーテ「前篇」

岡村一 訳 本田誠一 注

詩人の登龍門たる「牧人小説」で世に出るべく、「ガラテーা」を出版したセルバンテスだったが、その評判は必ずしも芳しいものではなかった。そこで今度こそ、詩人としての才能を知らしめるべく、韻文ならぬ散文によつて叙事詩を書こうと試みた。それが『ドン・キホーテ』である。そのための恰好の素材となつたのが、自らの人生であり、詩人・劇作家としての実績、兵士としての軍歴、アルジェでの捕虜生活、イタリア・ナポリでの恋愛などを素材として、稀有な理想を抱いて冒険へと駆り立てられる人間的な典型として、書物に憑かれた遍歴の騎士、『ドン・キホーテ』を生みだした。これが書物についての書物といわれるゆえんでもある。

第3巻 ドン・キホーテ「後篇」

岡村一 訳 本田誠一 注

前篇の成功に気をよくしたセルバンテスが、前篇の十年後、世を去るほんの一年前に急かされたかのようにして出版したのが、この後篇である。本作が書かれるにあたっては、前篇の成功にいやかろうとする、覆面作家による贋作（贋作ドン・キホーテ）の存在があった。セルバンテスはロベ・デ・ベーガの派とみられるこの偽作者に対する意趣返しとして、作品自体の中で、皮肉をこめて、かかる無法に対する反撃を行つた。作中では、前篇を読んだ人物たちが、（作者）の前で本物のドン・キホーテ主従に出会うことから生じるさまざまな驚き・愚弄・笑劇的顛末が語られ、「愚弄する者」と「愚弄される者」との境界があいまいになり、読者には、どちらが狂氣で、どちらが正氣か分からなくなる。最後に、主人公は狂氣から正気に戻り、すべては狂人の夢であったかのように……

第4巻 模範小説集

樋口正義・井尻直志・斎藤文子・鈴木正士 訳+注

短篇小説の名手でもあつたセルバンテス唯一の、十二篇からなる短篇集。序文に、自身について、「スペイン語で小説を書いた最初の作家」と述べている部分があるが、これは必ずしも誇張ではない。この短篇集は小説とはかくあるべしとする模範を示したもの、と解釈されることも多い。初期のイタリア小説と、後期のスペイン固有の題材を扱つた作品の二種類に分けられるが、いずれも、セルバンテスの才気がみなぎつている。とりわけ、「犬の対話」、「リノ・コネード」、「ガラスの学士」などのピカレスク的作品は傑作の名に恥じない。

第5巻 戯曲集

田尻陽一・岡本淳子・野村竜仁・樋口正義・三倉康博・矢野明絵 訳+注

アルジェでの捕虜生活から解放されて祖国に戻つたセルバンテスが、最初に手掛けたのが戯劇だった。それは自由への賛歌だった。しかし、当時の演劇界を牛耳ついたロベ・デ・ベーガの大衆迎合的な作風とは異なる、古典主義的なセルバンテスの作品が目の目を見ることはなかつた。『スマシシア』、『アルジェ生活』など、上演はされなかつたものの、演劇を人生の『喜び』と考へていたセルバンテスが精魂込めて書き上げた戯曲十八作品を集成する。

第6巻 パルナソ山への旅および詩作品

本田誠一 訳+注

晩年、自らの文学人生を振り返り、それを空想的な叙事詩に託し、アイローネを認めて懷古したのがこの作品であり、いみじくも、「小『ドン・キホーテ』」と称されている。自らを自虐的に「へば詩人」と呼びつつ、眞の詩才を欠いた者たちへ「本の戦争」を仕掛けるというアイディアには、セルバンテスの面目躍如たるものがある。せまくる死期を前に、当時の詩壇に対する手厳しい批判が赤裸々につづられた文学的遺書。巻末に、「無敵艦隊に捧ぐ」、「幸せおおき境遇を」、「フエリベ一世の崩御に際して」などの詩作品を付す。

第7巻 ペルシーレスヒヒスムンダの冒険

荻内勝之 訳+注

死後出版になる隠れた大作。北欧の王子と王女の一人が身分を隠し、兄妹と偽り、巡礼となつて北方の故郷からイベリア半島を通り、ローマまで旅する。その間、二人を引き裂くべきさまざまな障害が出来ますが、それを克服して、最後にはローマ法王の前で結婚するにいたる大冒険譚。晩年に至つて、リアリズムから再び奇想に富む新たな空想小説に回帰したとされるこの作品を、作者自身は、「スペイン語で書かれた最良の書ないしは最悪の書」であろうと評している。